

論文投稿の注意

論文や報告の書き方については、たとえば富田：科学論文のまとめ方と書き方の著書や、田中：科学論文の書き方のように定評のある良書がある。いずれも著者が気象学者ではないから、引用例は気象関係のものではないが、非常に参考になるので、一読を勧めたい。

前者は英文例が豊富に収録されていて、英文要旨や図表の英文説明を書くにも役立つ。また論文の書き方の注意事項が要領よくまとめられている。後者は戦前以来版を重ねた名著で近年改訂版が刊行された。研究発表万般にわたって、懇切丁寧な説明がされている。詳細はこれらの書物に譲ることにして、ここでは、天気投稿論文に対するコメント、編集事務担当者からの要望などをとにして、共通的な注意事項を挙げておきたい。

(1) 投稿するときは、調査研究の内容や性格に合った雑誌の投稿欄を選ぶこと。

学術雑誌はそれぞれ特色がある。専門分野・掲載論文の性格・程度・読者層が、雑誌によっておおよそ定まっているから、投稿誌の選択を誤るとせっかくの調査研究が生かされない。たとえば気象業務報告は“天気”よりも気象庁の“測候時報”が適しているというような配慮が必要である。

(2) 投稿規定を必ず読みこれに基づいて原稿を作成すること。

(1)とも関連するが、投稿規定に合わない原稿は受理されなかったり、改稿を求められる。原稿の枚数、文献の書き方、図の書き方の不備が一般に多い。気象集誌のように投稿規定以外に細目を詳しい投稿要領によって定めている雑誌もある。

(3) 表題は簡潔でしかも内容を適確に表現すること。

富田は次のチェックポイントを挙げている。

- a) 論文の主な内容を明確に表わしているか。
- b) 著者の強調したい点を表わしているか。
- c) 抄録カードの分類や索引作成に不便はないか。また誤記のおそれはないか。
- d) 長たらしくてむだな文字がないか。

(4) 論文や報告は他人が読むことを念頭において書くこと。

論文や報告は個人のメモやノートと違い、読者が論旨を明確に理解できることが肝心である。論文の構成、文章、図表などすべてにこの点の配慮が必要である。文章

は主語と述語をはっきりさせ、なるべく短く区切ること。

(5) 論文や報告は、まず調査研究の目的と、論旨が明確になるよう大綱を組立てること。

論文の構成の順序は、(1)目的、(2)方法、(3)結果、(4)討議、(5)結論となるのがふつうである。初学者の投稿論文の中には、しばしば目的がはっきりしなかったり、内容を整理せずにやったことを総べて載せようとするため、どこが新しく解明された点か、何を重点に言いたいかが不明確な原稿がある。論文や報告の作成にあたって、細かい解説・式の誘導・資料などを載せる必要があるときは、思い切って本文と切り離して、末尾に付けた方がスッキリすることもある。

(6) 論文要旨 (Abstract, Resumé) は念入りに。

読者がその論文を読むか否かの第一の目安は論文要旨である。また文献紹介誌に掲載される論文要旨は、多くの場合、原著論文の論文要旨が使われている。要旨は論文の目的と結果がわかるよう要領よくまとめること。

(7) 和文の論文は当用漢字・現代かなづかいで、学術用語は用語を統一し、むやみに欧語を使わぬこと。

漢字制限は時代の流れである。やむを得ぬ場合以外は当用漢字表にない特殊な漢字は避けること。印刷所の活字にない字がたった一字含まれているために全体の印刷が著しく遅れることは珍しくない。また、一つの論文の中で放射と輻射を混用したり、気圧配置・気圧分布・気圧のパターンと紛らわしい用語を統一なく使わないように注意。疑問がある場合は直ちに辞書（広辞苑・用字用語辞典・学術用語事典など）を引くこと。

(8) 数式には格別の注意を。紛らわしい字は明確に。

印刷所で活字を拾う場合にもっとも問題になるのは数式である。原稿が明確に書いてないと数式を正しく活字で組むことができない。大文字と小文字、ギリシャ文字、サフィックスの関係、位置や相対的な大きさの割合、ベクトルとスカラーの別などとはっきりと書くこと。数式や記号はできるだけ単純な表記を用いるようにすること。とくに誤りやすい文字は、 ω と w 、 ρ と p 、 σ と 6 と b 、 u と n 、 v と v 、 γ と r などの他、 p と P 、 s と S 、 v と V などのように大文字と小文字が同じ形の文字である。

(9) 原稿はよく読み返して推こうするとともに、でき

れば、内容のわかる他の人に目を通してもらうこと。

明確、簡潔、平易な文章。内容がよく整理された論文をと心掛けると、どうしても綿密な推敲が必要である。次に前掲冨田の著書から修正の要領を抜粋する。まず骨組み一覧表を作り、それを消したり書き足したりしながら大綱を決定したうえで下書きを作る。下書きができあがったら、数回にわたって読み返すのであるが、着目すべき点を1回1つにしぼった方がよい。その順序は、

- a) 論文の大綱を中心に……内容とその順序、重要な項目に落ちがないか、無関係・不必要部分の有無。
- b) 記載の正確を主眼に……とくに数字・数式・引用文・引用文献・人名・地名。
- c) 文章そのものを主眼に……下書きは詳細に書くのが普通だから文章の簡潔化を計る。(とかく論文が冗長だとの批判が多い)(10) 関連。
- d) 形式・体裁を主眼に上の順で読み返し練り直し、だんだん完成に近づいたら今度は形式・体裁が全体を通じて統一されているか、投稿規定や形式に合っているかを吟味する。
- e) 句頭点の打ち方……少なくとも、と、と。の統一を。また、と、との区別を明瞭に。

(10) 図表・本文の重複を避けること。

図の書き方については前掲投稿論文の図の書き方を参照していただきたい。図表と本文との重複、すなわち、同じ内容の表と図を重複して一つの論文に掲載したり、図表を一見すれば全く説明を要しないことをくどくどと本文で述べるなどの無駄が初学者の投稿には多い。

(11) 投稿は和文ならば必ず完全原稿を原稿用紙に浄

書すること。

(12) 参考文献は孫引きを極力避け、真に必要なものに限定すること。

(13) 著者校正

多くの学術雑誌では、投稿論文を印刷する段階で、初校または再校の校正刷を著者に送って校正を求めている。しかし、これまでの実績を見ると、著者校正は意外にミスが多い。もちろん編集委員が落穂拾いをしているので、問題になることは少ないが、印刷論文の誤植や脱字の被害は直接に著者に及ぶから、著者校正は念入りに少なくとも2回は見直す必要がある。たとえば、最初は字面を読み飛ばさないうで、一字一字でいねいに校正し、2回目は文章の脱落などに注意しながら校正洩れを直す。校正は赤字で、必ず校正記号を使うことはいうまでもない。本文以上に、目次・標題・著者名・脚注・図表の説明文・文献などの誤植は見落としがちである。また形が似た字、活字ケースで隣合わせに並んでいる字は植字の拾い違いが多い。詳しくは、長谷川：本と校正、美作・西沢：執筆・編集・校正などを読むとよい。前者は手軽な読物、後者は専門家向きである。なお、活字になるととかくアラが目立つが、原稿の不備を校正段階で直すことは極力避けること。止むを得ぬ場合は組んである活字をできるだけ動かさぬよう字句を調整しないと、高額の組直し料を支払うはめに陥る。

あとがき

調査研究は論文・短報・要報など内容にふさわしいまとめ方をして印刷原稿を作り、そのつど投稿する習慣をつけるとよい。それが気象学全体の水準を上げる道でもある。

文 献 (現在入手可能なものを本文掲載順に挙げた)

- 冨田軍二：科学論文のまとめ方と書き方。朝倉書店。209p。
 田中義磨、田中 潔：科学論文の書き方。裳華房。398p。
 河村 武，1969：投稿論文の図の書き方について。天気，16。189～192 (本誌に再録)。
 新村 出：広辞苑。岩波書店。
 たとえば、広田栄太郎編：新編用字用語辞典。東京堂。364p。
 桜庭信一編著：気象学用語事典。いずみ書房。166p。
 木原研三，1968：気象学者のための英語(1)～(6)。天気，15(4)～(7)，(9)，(11)
 渡辺次雄編，1960：気象英文用例抜萃集。日本気象学会。39p。
 日本科学技術英語研究会編：実用科学英語ハンドブックシリーズ No. 1～No. 6。丸善。
 黒田政彦，冨田軍二：英語科学論文用語辞典。朝倉書店。320p。
 日本物理学会編：Journal の論文をよくするために。日本物理学会。168p。
 平野 進：技術英文のすべて。丸善。483p。
 長谷川敏平：本と校正(中公新書)中央公論社。
 美作太郎，西沢秀雄：執筆・編集・校正。岩崎書店。

文献目録（主要雑誌の文献目録に限定した）

American Meteorological Society: Meteorological and Geostrophysical Abstracts

- 柴田 佑, 1959: 気象集誌の文献目録（第2輯1巻～33巻）図書月報, 4, 5（特別号）
 小山しげ, 竹田邦子, 1962: 欧文彙報 (Geophysical Magazine) の文献目録 同上, 6（特別号）
 小山八洲夫, 1961: 産業気象調査報告の文献目録（昭和2～33年）同上, 7（特別号）
 西崎睦子, 榊井忠男, 1961: 研究時報の文献目録（1～10巻）同上, 7（特別号）
 柴田 佑, 望月幸代, 1963: 中央気象台彙報（気象雑纂を含む）の文献目録. 同上, 9（特別号）
 白岡久雄, 鳥山三郎, 1964: 気象研究会誌の文献目録, 同上, 10（特別号）
 河村 武, 1968: 地理学関係学術雑誌に掲載された気象学関係文献目録, 気象研究ノート, 98, 158～162.
 気象研究ノート編集委員会, 1970: 気象研究ノート総目次（1～100号）気象研究ノート, 101

第19期第1回常任理事会議事録

日 時: 昭和51年9月8日 14:00～17:00

場 所: 気象庁総務部入札室

出席者: 岸保, 小平, 浅井, 朝倉, 内田, 奥田, 神山, 河村, 門脇, 立平, 股野, 各常任理事

報 告

〔庶務〕 1. 8月19日, 第18期限りで辞められた理事・監事12名にボールペン・シャープペンシルセット（価格4,000円）を贈呈した。

2. 9月4日, 地球物理研連幹事下鶴大輔氏から, 同当番学会の日本気象学会へ, 昭和52年度文部省科学研究費補助金の審査委員推薦依頼がきたが, 浅井富雄氏, 田中正之氏が52年度も継続する委員となっている。

3. 役員異動に伴う登記は, 8月31日付で完了した。

〔会計〕 8月分の会計報告, 名古屋における大会には予算に計上してある旅費を関係者に実費を支給することとする。

〔天気〕 発行は順調になってきた。アルバイト体制は, 継続して行きたい。広告も順調である。原稿は発行月の5日までに頂きたい。

〔講演企画〕 9月3日夏季講演会シンポジウム「Monex/FGGE の参加計画について」が気象庁で行われ, 多数の参加者があった。

議 題

1. 各委員会委員について, 未確定のところは, 早急に決めて貰い全国理事の承認をとる。

2. 「教育と普及」について（夏季大学に代り）。委員会設置の必要性和活動計画が河村理事から述べられた。夏季大学も年々参加者が多くなり, 気象学会の将来のためにも教育と普及に専門的に取り組む組織が必要であ

る。活動計画としては,

- (1) 普及講座……天気編集委員会と協同
- (2) 夏季大学……できれば支部と共同で地方でも開きたい
- (3) 気象のカリキュラム研究を推進させる等

3. 学会奨励金受領候補者について, 9月3日に行われた選考委員会の審査結果が立平理事から報告された。自薦・他薦を含め4名の候補者があったが次の会員を受領者として選定し, 全理事の書面審査を受けることにした（選定理由は670ページ）。なお, 仙台管区から佐々木芳春会員（深浦候測所）を推薦する旨電話連絡があったが, 推薦書類が未着なため, 来年度に考慮することになった。

山田 幹夫 香川県立高松高等学校教諭

力 武 恒夫 名古屋地方気象台勤務

松村三佐男 室戸岬候測所勤務

4. 「第14回理工学における同位元素研究発表会」の共同主催について。

共同主催とすることを承認。運営委員は 矢野 直 会員を推薦したい。

5. 学会運営の問題点について。

札幌の伊藤 宏理事から次のとおり提案があった。

- (1) 日本の社会の中における研究, 技術に従事するものの地位の向上。
- (2) 最近話題の環境問題や従来から関連の深い農業その他における技術の向上。
- (3) 外国との交流の増強。

承認事項: 朝比奈 均ほか9名の入会を承認。